

ナギ人形

熊野川沿いの最も大きな庵……増皇の屋敷……というより、別邸といった方がいい。

増皇は、熊野川の下流、速玉神社にも、屋敷をかまえ、行き来している。

安珍が通されたのは、襖で仕切られた十畳程の部屋である。

板の間の上に、畳が敷いてあり、その上に増皇が座っている。この時代、もちろん、一般の民家で畳を見る事はない……珍しい代物といってよい。

「事情は聞いた………。迷惑をかけたようだな。」

増皇が口を開いた……。

「……昨今の熊野での風紀の乱れは著しい。父の三回忌を機会に風紀を厳しく取り締められという命令を下したのだが……うまく、意味が伝わっていなかったようだ。

あの者達には、改めて、命を出し、注意しておいた……。許せ……。」

増皇は頭を下げた。

「いえ、こちらこそ、大斎原を騒がせ、本当に、申し訳ない事をいたしました。」

目上の者に先に頭を下げられては、どうしようもない……。安珍も頭を下げる。

……増皇の年齢は、自分より少し上ぐらいだろうか……

前別頭の増慶が3年前に亡くなって以来、熊野の別頭職は不在になっている……次期、別頭職の最有力候補が、この増皇だ。

「それにしても、おぬしは、勇気があるようだな……。」

「いえ、そのようなものなど……。」

「ばかを申せ……他人の……しかも、癩病の者の代わりに、棒で打たれようとするとは……よほど、肝が座っている……。」

「いえ……実は、私は、怖くてしかたがなかったのです……。」

安珍は、告白した。

「けれど……逃げるわけにはいかない……と思いました……。」

私は……ある娘の事を想い出していました……その娘……清姫は、巡礼に訪れるどんな醜い障害の者も……自分の身をかえりみず、奉仕していた……それが、この熊野坐神の御前で、あのような扱いをするとは……！……私は、清姫に負けるわけにはいけないと思っただし……なにより、清姫のように参詣者を助けてきた者たちの想いを無にするような行為が、許せなかったのです。」

「……すると、おぬしは、その清姫とやらを愛しているのか？」

増皇が、突っ込みを入れた……。